



1 取組にあたって

自主防災組織の集合体である「かがわ自主ぼう連絡協議会」が、他団体や他地域へのコンサル活動や指導的取組を行うとすれば中途半端な「技術」や「情報」は私達の活動の信頼性を失う可能性もあって、徹底した研修を受けることで技術力アップを目指し、毎月地元消防署へ通い、「応急手当」や「心肺そ生」、更には「ロープワーク」「担架組み立て搬送」の指導を受けるとともに災害発生時、発生後の行動、又、避難所の運営、防災備

品などを神戸市内の自治会（まちづくり協議会）等への訪問や、人と未来の防災センターへ足しげく通って、体験した情報をつぶさず入手しました。

ただ問題がありました。それぞれの自主防災会の会員を、行政エリアをこえて、派遣することにとまどいがありました。

自主防災会は我が街、我が地域を守るために存在しているものであって、この垣根を超える口実が必要になり、考えついていたのが平成18年に第11回防災まちづくり大賞の理事長賞をいただいておりますことからそのお礼奉公で要請があればどこへでも伺って「訓練」や「研修」、更には、防災に関するコンサル業務を実施する事にしましたわけです。平成19年に14件、20年に17件、21年に22件、22年が23件と、県内にノウハウの展開を図ってきましたが、今ふりかえるとこの4年間で一番苦しい時期でもありました。すべてがボランティアです。

訓練にでかける車輛の燃料とか、参加者会員の食事代等の捻出に苦労しましたが、平成23年から香川県から自主防災組



中学生へ応急手当の指導



地域の皆さんへ担架組み立て搬送の指導



地域の皆さんへ応急手当の指導



クラッシュ対策訓練の資材

織へのフォローアップ事業として、認められ、この点の苦労はなくなりました。

2 東日本震災復興支援経験

平成23年3月11日、東日本大震災が発生。四国からの距離もあって躊躇しましたが、復興応援することによって、何事にもかえられない生々しい体験をすることによって、県内の自主防災組織へのノウハウ展開が中味の濃いものになるものと確信して、この年の4月から8月までに3度（6～8人規模）、石巻と陸前高田へ支援に行ってきました。

私達が思っていたとおりとなって、復興支援後は、県内各地より研修の要請がとび込んできました。

この東日本大震災以降は年間50件を超えるほどに防災に対する県民の意識が向上したように見受けられ問い合わせの内容も多種多様です。

3 仲間からの問い合わせ

様々な問合せを受けますが、その内容について少しご紹介します。

- ①毎年リーダーが交代して活動に継続性が無い、どのような対処をすればよいのか？
- ②活動資金の捻出方法を教えてください
- ③海岸線の集落で海拔2mの位置に200世

帯、近くに避難所が無い、どこへ逃げればよいのか

④自宅避難所を作るにはどのような方法で資金はどの位必要か？

⑤共助の立場で備蓄する場合の保管場所とローリングストックの具体的方法

⑥活動に女性をとと思っているが具体的にどのような説得がよいのか？

⑦チーム活動を元気に継続させる秘策はなんですか？

以上のような内容をよく聞かれます。そこで私達が実体験で培った体験（のりこえてきた事実）をもとに分かりやすく、ていねいにお答えするように心がけています。

4 取組で大切にしていること

私達が行動する中で一番大切にしている事は、「記録を残す」、「振り返りを行う」、そして「改善を図る」要するに企業活動の中で習得した「PDCA」サイクルを常に回した取組を行うことによって、県内の自主防災組織や学校現場への防災力がより向上するのではないかと考えているところです。

かがわ自主ぼう連絡協議会を立ち上げて丸9年、300件を超える取組を体系的に整理し今後の活動に大きく寄与することなどが評価され、このたび栄えある総務大臣賞（防災まちづくり大賞）を受賞。これをはげみに尚一層、自主防災活動の活性化に努めていきたいと思えます。

